

屋台がつくる高密度空間の再考

—機能的側面の分析と提案—

建築学専攻

プロジェクトデザイン研究

序章 はじめに

0-1.研究背景

屋台とは、ものを売る台に屋根を付けた移動可能な店の事である。日本では江戸時代に「振売型屋台」と呼ばれる店が発達し、戦後は闇市などにおいて人々の食生活を支えた。これが日本の近現代の屋台の原点といえるが、騒音や衛生面が問題視され、食品衛生法(昭和23年)等の法律で営業が制限されて以降は、屋台の数は全国的に減少している。本研究では、衰退と発展を繰り返してきた背景をもつ屋台を、機能的、文化的な側面から再考していく。

0-2.研究目的

本研究の目的は、屋台がつくる空間の再生である。屋台を使って商売をする文化が消えつつある中で、屋台を媒体にして売ること、買うこと、食べることに効果があるのか解明する。

0-3.研究方法

「屋台の店の最も魅力的な点は、密度の濃い空間をつくっているということである」という仮説をもとに進める。密度とは、一つは人口密度、二つ目にコミュニケーションの密度、そして、機能の密度である。人間が5~6人ほど収まる屋根の下では隣の人の気配を感じる程の密度である。また、屋台という建築物は移動・調理・販売・食事などの様々な機能を持つ点が、建築物として先進的である。屋台の機能が、密度の濃い空間にどのように影響しているのか考察する。

第1章 車輪と屋根の変遷

屋台は、車輪によって移動可能になり、人を囲う屋根によって建築的な空間となる。これらをもつ屋台の出現と発展を探求する。

1-1.車輪の発展

紀元前、ピラミッド建造のための舗石道路は主に軍事道路として利用され、運搬にはころという道具を用いていた。18世紀にはイギリスで提案された道路舗装方法によって、駅馬車による商業が発達した。また、19世紀には鉄道の発展によって舗装の整備が悪化し、荒廃した道に対応して自転車に120cm程の前輪が付いていた。

日本では、江戸中期の享保年間(1716~1736)に振売型の屋台が現れる。振売型屋台が外食産業を牽引した。そして、1878年(明治11年)に神田昌平橋が日本初の本格アスファスト舗装を施されて以降に車輪による移動が発達していく。

1-2.路上販売における屋根の発展

1-2-1.戦後闇市

第二次世界大戦で荒廃して以降には、闇市における簡易的な飲食形式が広まった。闇市では、地面に布

MJ23119 能多 玖梨花

指導教員 山代 悟

を敷き販売を行うこともよく見られた。当時の経済状況を考慮し、リヤカーで商品を運ぶ様子や、リヤカーに屋根を付けて売り歩く様子からは、屋根は運営面にある程度の余裕がある運営形態であるということが読み取れる。

第2章 日本の屋台の現状

2-0.本章について

戦後、社会基盤が整って行くと共に衛生面が問題視され、1949年に厚生労働省は屋台を減らしていく方針を掲げた。本章では、車輪と屋根の機能に着目して屋台を分類し、調査対象を明確にする。また、福岡市や呉市において屋台が地域産業として成立していることを明らかにする。

2-1.屋台の定義

2-1-1.屋台の分類分け

①2つの機能における分類

屋根と車輪の有無に着目して屋台を分類する。「非屋根型」は、車輪があり移動はできるが、屋根がない形態である。「屋根型」は、車輪と屋根の両方を装備する。

	屋根	車輪	台
振売型屋台	×	×	○
非屋根型屋台	×	○	○
非車輪型屋台	○	×	○
屋根型屋台	○	○	○

【図1 屋根と車輪による分類】

②本研究の調査対象屋台の定義

前項で分類した屋根型の屋台のうち、各々の屋根の仕様範囲によって分類する。飲食機能の上に屋根が架からないものを「小屋根型」、飲食機能の上にも屋根があるものを「大屋根型」とする。本研究では、より多くの機能を持つ屋台を研究対象とするため、大屋根型の屋根を持つ屋台を調査した。

2-2.屋台が残る都市

①福岡市：日本で唯一屋台に関して条例(*3)を定めており、現在も屋台が連なる光景が多く存在し、福岡の観光資源として成果を出している。

②呉市：戦時において軍艦のまちとして栄え、現在も工業的な技術が発達している。屋台組合や市民からの要望で1986年に市が水道・下水道と電力供給の整備を行った。明確なルール運用のもと、9つの屋台が営業を行っている。

第3章 蔵本通りにおける屋台運用の実態調査

3-0.本章について

広島県呉市は、蔵本通りにおいて屋台の営業が許可されている。本章では、呉市において屋台がどのよ

うに運用されているのかを現地調査によって示す。

3-2.屋台運用の実態

3-2-1.屋台の営業環境

①周辺環境

蔵本通りは、呉市中心部に位置する。堺川に架かる6つの橋を基準に、蔵本通り周辺の施設をまとめる。生活に必要な施設や店舗等が駅から徒歩20分ほどの距離に集約されている。

②営業時の配置状況 営業開始前から撤退時までの屋台の配置を図2に示す。「蔵本通りの屋台に関する要綱」にもある通り、図2のように配置が指定されている。場所取りはその日によって変化する。

3-2-2.組立・収納

蔵本通りから約100mの場所に約120㎡の保管場所が用意されており、営業準備時に引き歩いて運ぶ。調査日の2024年9月17日と18日は9台の屋台が駐車されていた。



【図2 屋台配置場所】

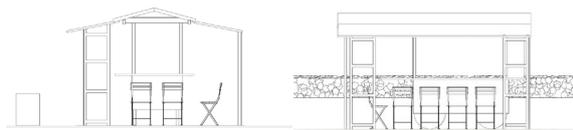
3-2-3.動力

蔵本通りで調査した屋台Aでは、ノーパンクタイヤと一般軽自動車用のタイヤを装備している。

3-3.屋台空間の密度

この調査では、屋台の台・屋根・の寸法を計測し、同時に収容人数を記録して人口密度をはかる。呉市の屋台Aの店主に協力を得て行った。

調査によって、屋台Aにおける人口密度は、2.91人/㎡であることが分かった。これは、他の一般空間と比較すると狭く人同士の距離が近い。



【図3 屋台Aの内部空間立面図】

◎考察

実態調査によると、屋台の人口密度は高く、余分な空間はない。しかし、一人当たりの食事に必要な広さは十分に確保している。

3-4.本章のまとめと考察

呉市は、屋台を残していくために規則をつくり屋台組合を発足させた。これらは蔵本通りの敷地や範囲、また、時間帯や寸法等を定めており、これにより地域の秩序が守られている。時間帯になると路上現れるという仮想的営業形態が、移動可能な寸法を定め狭い空間を作り出している。

第4章 屋台の設計と検証

4-0.設計趣旨と概要

呉市では、行政がインフラの整備を行い屋台営業者は水や電気の供給を得て路上販売を行っている。また、屋台の重量が大きく、屋台を移動する際に店主

の負担になっていることも分かった。本章の提案では、「車輪」と「屋根」の根本的な役割を見出し、新しい屋台を提案する。

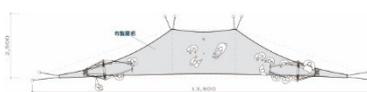
4-1.設計提案

①機能分離型屋台：屋台そのものの重量によって、非効率的な準備を要していることから、必要な機能を選択して屋台を運営できるよう計画する。

②柱を運ぶ屋台：105mmの角柱を、屋台の装備である車輪で運び、建築における構造部材のうち縦軸の根幹である柱を可動式なものとして表現する。

③高密度空間の形成：運ばれた柱は膜の屋根を支える柱になり、複数の屋台が同一の膜屋根の下に配置し、飲食スペースを共有する。

④敷地と運用の条件：この提案は、畳一畳分と類似する大きさであるため、一人で操作することに適している。屋台を運用する敷地と保管する敷地が徒歩圏内にある場合を想定し屋台を引いて移動を行う。



【図4 屋根伏図兼平面図 S1:300】

4-2.検証

この検証の目的は人口密度の高度化を実現することが有効であるかを検証することである。そのために原寸大の模型として屋台を製作した。風や気温等の自然発生的な影響に耐性を持つということが明確になった。



【図5 立面図S1:100(左),組立の様子(中央,右)】

終章 今後の展望

屋台という媒体を使って商売することの効果は、見ず知らずの人と話をする貴重なコミュニケーションを生む事である。そのために機能が充実し、はたらいっている。プライバシーの意識が強化している社会の中で、このような小さく狭い環境や会話の密度が、非日常でありながら、本来人間の中に潜在する楽しさや幸福感を取り戻すことになると筆者は考えており、この実現に向けてはさらに文化的な屋台の必要性等に関する研究が必要である。ただし本研究はその実現の第一歩になったといえる。そして今後は、このように小さくコンパクトな建築に必要な機能を備える技術が、部材の軽量化や接合の簡略化などの技術革新とともにさらに有効なものとなることを期待する。

参考文献

- *1)新訂 江戸名所図絵,市古夏生・鈴木健一,ちくま文庫,2009
- *2)東京戦後地図ヤミ市跡を歩く,藤木 TDC,実業の日本社,2016
- *3)福岡市屋台基本条例,福岡市,2013
- *4)呉の歴史 呉市制 100 周年記念版,呉市役所,2002
- *5)呉地理情報マップ,呉市ホームページ